安心禪話

21
60

019316-000-9

特16-179

安心禪話

森　道本／述

M34. 8

ABG-0002

安心禪話

森道本述記

誠に世の中は無常迅速電光石火のもので、光陰矢の如く時人を待たぬことであります、昨日まで壮健全を誇つて居た身も、今日は無常の嵐に誘はれて、露と消え往く五尺の死屍となる

縱ひ毘那迦陵諦歎の音聲を聞くとも、夕の風耳を拂ふ、縱ひ毛嬙西施美妙の容顏を見るとも、朝の露眼を遮る、

と、我が高祖大師は用心集の中に説かせられてある、實にこの世は假の宿である、

大聖釋尊は法華經の中に

三界無安、猶如火宅

と御示しになつてある

昨日見し人はと問へば今はなし
明日また誰れか我れを問ふらん

どふでござりますよそ事と思ふてはならぬ、夢に等しき榮花、幻に等しき利營に耽つて、人世の一大事を等閑りにするといふは、返す〳〵も愚かな次第でござる、一日も早く佛道に歸入して、生の從來する所、死の從來する所を究むるのが、何よりの肝要である、

併し生死といふことは、なか〳〵明らめ兼ぬるものと見ゆる、彼の獨逸のショッペンホーエルといふ哲學者が、こんな愚痴をこぼして居る

凡そ人の生活すといふは、死を厭ふの慾望より出るものなり、慾望とは不足を感ずることなり、不足を感ずるは苦痛なり、されば生活は苦痛なりといふも差支なかるべし、如かず山林に隱遁して、自己の意思を消滅し去らんには、

と悲しんである、一度び生死の道に踏み迷ふと、流石の大學者もこの通りぢや、まことに氣の毒な次第で、苦惱煩悶、日夜に思ひ、日夜に煩らふて居る、夫れを思ふと我が國の楠公父子の覺悟なぞは驚いたものぢや、正行が四條畷で討死する時の歌を見ると、能く解つて居る

返らじとかねて思へば梓弓
無き數に入る名をぞとゞむる

と讀んである、どうです立派なものでは御座らぬか、中村重賴なぞも、亦た斯ふいふ美事なことをいつて居る

かゝる時さこそ生命の惜しからめ
かねて無き身と思ひ知らずは

と我國の勇士は皆な美事なことである、太田道灌なぞは定正の刺客に、浴室にて刺された時、神色自若として、槍の鋒鋒を抑へつゝ

昨日までまゝ安執を入れおきし

へんなし袋今やぶりけむ

と絶命の歌を殘された、太田道灌は泰叟和尚に參して生死を極め、楠正成は楚俊禪師に就て印可を得たとある、楠正行は父正成の教訓で安心を極めて居たので、皆な佛道に歸入した安心の表明であるのぢや、前に申した哲學者の言葉と、これ等の歌とを較べて見ると、生死といふことについての明らめ方が、雲泥の相違であらふがの

扨て斯の如き大學者でも、生死の道には踏み迷ふことたが、今相互はどうであらうぞ、すでに受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ひ、此の身今生に度せずんば、何れの生にか此の身を度せんぢや、此の身を度すると申してむづかしい譯ではない、自己を解了へて、安心の歸着を定むるといふに外ならぬので、自己を解へて安心の歸着を定むるといふは、生死を明らむるといふのぢや、この生死を明らむるといふのは、佛家の一大事を了得するといふことになるので、此の一大事を了得するには、

佛法の教意に依らねばならぬのであるが、佛法の教に依止して往くといふことについては、隨分込み入つた話しもあるのですが

先づ佛法は、廣大無邊で、竪には三世を極め、横には十方に亘り、其の教理は海よりも深く、山よりも高く、實に甚深微妙不可思議の大法門である、今それを簡短に申せば、三世因果の道理より、人間所生の大本を說き示し、善惡正邪の區別より、未來永劫の果報を說き明かして、自己本具の佛性を開發せしめ、果滿圓成の佛界に入らしむるの慈門である、此の門に入るには、聖道門あり、淨土門がある、自から修行し精進不退にして到達するのが聖道門で、他の力に依り賴りて一向專念に進み入るのが淨土門であるが、吾宗は、淨土門、聖道門に拘はらず、直指人心見性成佛といふ上から、煩惱即菩提、生死即涅槃といふ妙境に往くのでござる

譬へば生死煩惱は大海の波浪で、菩提涅槃は彼岸の陸地で、佛法は水上の船筏である、人間が此の娑婆世界に生を受くると、其の當時は無垢淸淨の菩提涅槃の境界に

あるけれど、三才五歳と智慧づきて、貪瞋痴の三毒に犯され始めて、遂には生死煩惱の荒波に泳ぎ出さねはならぬ身となるので、中々に彼の岸に渡りて、菩提涅槃の安樂な境界に至ると云ふは困難の事である、これには是非とも佛法といふ筏に取りついて、安心起行の舵を採り、三寶歸依の帆を擧げて、直指人心見性成佛の妙境に達するのでござる、

此の佛法の筏に乘り、三寶歸依の帆を擧げ、安心起行の舵を据るといふことは容易きことではない、二祖慧可大師といふ御方は、如何にしてこの妙境に達したかといふことを、我宗　太祖國師の傳光錄に依つて御話し致しましようか、

震旦の二祖慧可大師は、始め神光と申しまして、才識絶倫曠達の士であつて、長らく伊洛で學を究めて、ひろく群書に通じ善く玄理を談ぜられたが、毎々孔老の敎は禮術風規に止まり、莊易の書は未だ妙理を盡したるにあらずと歎息して居られた樣子だが、其の時分達磨尊者が西天より來りて少林山に居るといふことを聞きて、大

師に參得せんものと、少林山に至りて玄境の奥理を參學致すことになつた、けれども達祖は常に端坐面壁を事として居て何事も誨へて呉れない、そこで神光の考ふるには、昔しより道を求むるの人は、骨を敲きて髓を取り、血を刺して饑を濟ひ、髮を布きて泥を掩ひ、崖に投じて虎を飼ふといふ例もあれば、我れ今玄妙を得んとするに何ほどの事があると、益々其道を得ることに勵んだ、或る時天大に雪降り積ること膝を過る程になりても更に驚かなかつた、すると達磨大師漸やく口を開いて、汝ぢ雪中に立つて何事をか求むると御尋ねになつた、そこで、神光の慧可は、どうぞ甘露の法門を開いて群生を濟度してもらひたいので御座ると答へた、達磨の申さるには、諸佛無上の妙道は曠劫精進し、行ひ難きを行ひ、忍び難きを忍びて始めて得るのぢや、そなたの樣な小德小智輕心慢心の輩は、徒らに眞乘を冀はんとするも、勤苦に勞するのみで駄目ぢやと知らぬ顔をして對手になりません、此時神光も大ひに勵みが來て、利刀を取りて自分の左の臂を斷ち切りて達磨の前へ突き出した、す

ると達磨もこれならばと思つたさうて、諸佛初め道を求め法の爲めに身を忘る、今汝吾前に斷臂して之れを求めんとするは殊勝な奴ぢやと申され、慧可といふ名前を下された、夫れから八年間を過ぎて、諸佛の法印得て聞くべきかとの慧可の尋ねに、諸佛の法印人より得るに非らずと達磨は答へられた、慧可曰く我心寧からず乞ふ師與めに安んぜよと、達磨乃ち聲を勵ましていふのに、心を將ち來れ汝の與めに安心せんと、慧可大師良久して心を覓むるに了に不可得と申した、そこで師匠の達磨は我れ汝が與めに安心し竟んぬと、始めて印可證明を與へられた、之れで慧可大師が玄妙の道理を諦め得たので、不可得の當處に於て安心立命し了つたのである、この二祖の安心は本來の面目現前の時である、即ち娑婆即淨土身心即成佛の時である、曠達優才の士、殊に孔老の敎儀を盡くし、莊易の蘊奧を究めても、尙ほ佛祖の妙道に達することが出來ず、正師を得て坐觀究理の行を修めても、未だ安心立命の位置に達せず、起行怠らず辛勞身を捨つるまでに至りて、安心不可得で漸やくその師資

感應の道に至りたとは、何んと古聖先德の道に盡されるのが親切であらうがな、さてこの安心起行を脩めて、自己本具の佛性を見出さんとするには、先づ信心を確立せねばならぬ、信心を確立して往くといふのは、自らを信じ己れを了解へて、生を明らめ死を明らめ、我が身我が心を抛捨して三寶に依止することをいふのである、三寶とは佛法僧の三寶である、一たび佛法僧の三寶に歸依して、三寶に依止するといふ境界になれば、最早や身心佛法となり了るのぢや、そこで其人の日々の行持がすべて佛行となり、其人の住所が即ち淨土と現はるゝのである、こうなるとしめたもので、治生産業の動作が一々實相の法門となり、行住坐臥が即身即佛娑婆即寂光淨土で、此身此儘佛同躰の境界になるのである、森羅萬像柳綠花紅も皆な之れ同躰一如といふことになるので、更に疑ふべき所はない、

今信心を決定して三寶に依止し、身心を抛捨し、生死を透脫したる上より、この世の中を見れば、日々の動作、即ち茶を呑むも、飯を喫べるも、商業に從事するも、

官途に出仕するも、農工業を營むも、皆なこれ佛行にあらざるなく、國恩に報じ、父母に報じ、三寶に報するの行持にあらざるはなき次第である、ところが萬一にも、一念決定せず、人我名利の爲めに修するといふことになると、丸で反對の結果に落つるので、坐禪辨道を修するも、讀經禮拜を爲すも、供養稱名に怠らざるも、世間有爲の所行に止まりて、相變らず貪瞋痴の三毒を離れず無明執着の夢に長ずるのみ、とても解脱の道に近づくことが出來ぬのである、又た縱令一旦信心決定しても、無明煩惱の妄念が起らんとは定め難い、これといふも矢張り信念の確立が足らぬからのことで、若し信念の確立が足らず、無明煩惱の雲に覆はさるれば生死流轉に落在して、生を易へ死を易へても、浮ぶことの出來ない素凡夫となつてしまう、併し信念を確立せしめるといふについては、爰に一つ大なる邪魔物がある、この邪魔物を取拂はなければ信念は確立し難い、其邪魔物がなんであるかといふと、これは申す迄もない過去の業因と云ふものぢや、過去の業因ということを話すに就ては、善惡

因果の三時業といふことから述べなければならぬ、先つ三時業とは第一が順現業、次が順次業、それからが順後業といつて、この三つは善惡につき添うて、車の輪の如く廻つて居る、自分は如何に信念確立のつもりでも、この過去の業因に纏綿はれると、其信念は知らぬ間に搖ぎ出すのぢや、世にも恐るべきはたゞこの因果の理で、善惡共に微塵も寸毫も欺くこと昧ますことの出來ぬものである、然るにこの過去の業因、信念確立の邪魔物は、どうすればこれを拂ふことが出來るかといふに、たゞ發露懺悔の一事を修するより外に道はない、我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔と、其の造り爲せる過去一切の罪業を、佛前に發露懺悔すべきである、

こういふ譯で信念確立の爲めの發露懺悔が濟む、發露懺悔が濟めば淨信は自ら生ずる、其狀恰かも雲晴れて日光を拜むに等しい、其淨信よりして彌々三寶依止の境界に精進致したことならば、三聚淨戒に致せ十重禁戒に致せ凡てこれを持つことが

出來て、諸佛諸菩薩の仲間入りをすることは何の雜作もない、斯うなれば我即佛、佛即我、諸佛諸菩薩の御悟りを、其儘相互に悟ることが出來て、この身この儘金剛不壞の佛身となり阿耨多羅三藐三菩提に證入し了ることが出來るのである

斯の如く說き來りたものゝ、我宗は元來不立文字敎外別傳である、死の明むべきものもなく、生の究むべきものもない、煩惱として厭ふべきもなければ、菩提として欣ぶべきものもないのぢや、善惡の差別もいちねば、邪正の認むべきもない、修もなければ證もない、我もなければ他もない、佛もなければ凡夫もない、夫れどころではない、盡大地更に一物もない、森羅萬像休し來れば、何れに向つて不可得を訴ふべきぢや、サテ斯うなると御前眞暗で、薩張り解るまい、妄想してはならぬ、森羅萬像一時に現はれ來つたではないか、實參實突し來れ、三界は唯心の所造であるぞ、能く落ついて見れば、法々位に住して世間相常住である のぢや、諸緣を放捨し萬事を休息して、少しく工夫して見るがよい、此工夫こそ吾

宗信徒の持前であるのぢや、

太祖圓明國師の御言葉によれば

外緣をやむれば內萬慮なし、惺々として昧さず、了々として本と明かなり、古今をわかたず、自他をへだてず、諸佛の所證、諸祖の傳心、毫末もたがはず、和同し來るが故に、西天と東土と通し、漢朝と和國と融接す、古も是の如く、今も如し是、たゞ古をしたふことなかれ、今をすごさず、修すべし、聖を去ること時遠しと思ふことなかれ、おのれをすてずあきらむべし

とある、日々徒らに自他を暗ましし、佛法を弄んではなりませぬぞ、生の從來する所、死の從來する所を究め、速に菩提に入つて、疾く佛身を成ずべきである、毫末の疑ひだも心に懷いてはなりませぬ、念々修し念々證すべきで御座りまする、

《終》

若人欲了知
三世一切佛
應觀法界性
一切唯心造

明治卅四年八月廿八日印刷
明治卅四年八月卅一日發行

不許複製

著者　森道本　東京市芝區芝公園第七號地二番
發行者　今村金治郎　東京市芝區露月町十八番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
發行所　東京市芝區露月町十八番地　鴻盟社

2D-69